第 10 回日本臨床腫瘍学会参加レポート

若尾直子

１）要約

ますます複雑かつ細分化してきているがんの治療において、抗がん剤による治療は今後より一層がん治療の重要な柱となる。そこで患者としてもがん治療の進展を学び、がん治療にかかわる医療者と学術的な学びの場を共有したく第 10 回臨床腫瘍学会に参加した。

2）序論

がん治療学会は昨年から患者や患者支援者等一般に学術会議を開放し、開かれた学会として門戸を開いている。今回の第 10 回臨床腫瘍学会（2012 年 7 月 26 日～7 月 28 日）では参加費 3000 円のところを 2000 円とし、参加者には一般用ランチョンセミナーの用意もあるペイシェント・アドボケイトプログラムを利用して参加した。交通費や宿泊費の負担はあったものの 50 名くらいの参加があり、臨床腫瘍の今と、変わりつつあるがん医療と向き合おうとしている臨床腫瘍学会会員の今を見た。

3） 本論　参加セッション

7/26

がん患者・家族支援

- 化学療法における妊孕性への影響に関する医療者の情報提供の検討
- 国際的がん患者支援団体と強調したがん患者アドボカシー活動
- 前期中等教育課程における、緩和ケアを中心としたがん教育の実践
- がん患者の就労支援に関するがん専門医の意識と医療提供体制の現状に関する調査

ランチョンセミナー

- 肺がん：肺がん領域における近年の進歩

  金田　裕靖（近畿大学医学部内科学教室腫瘍内科部門）

公開シンポジウム　がん患者の必要としているがん医療

～地域でがん患者を支えるためには～

がん医療におけるコミュニケーションと精神腫瘍学的サポート

- 患者意向を重視したコミュニケーション技術（ＳＨＡＲＥ）：5 年間の軌跡

- 学生・研修医へのコミュニケーション技術教育
- 治療を決める際のがん患者質問促進パンフレットの有用性について

我が国における臨床腫瘍学の歩みと今後の展望

・7/27

乳がん治療の個別化

- 早期Ｌｕｍｉｎａｌ乳がんにおけるＫｉ-67、組織グレードの相関、比較、併用の検討
- HER2 陽性ホルモン陽性乳がんにおける術前化学療法後病理学的完全寛解(pCR)の臨床的意義と今後の治療戦略

チーム医療②

- がん専門薬剤師による薬剤師が依頼の有用性の評価
- がん化学療法におけるチーム医療の現状と将来の展望　がん専門薬剤師の視点から
- 杏林大学病院におけるがん診療連携の試み（三鷹キャンサーネットの取り組みから）
- 病院と地域を結ぶ緩和ケアチームの取り組み　～地域に出ていく緩和ケアチーム～
- 東日本大震災時おける「がん患者」難民防止に果たした「がん診療相談室」の役割

分子標的薬の他姓克服

- ジストのイマチニブ耐性
- 非小細胞肺がんにおける EGFR-TKI 耐性
- ALK チロシンキナーゼ：肺がんの新しい分子標的
- モノクロナール抗体治療薬に対する耐性メカニズムとその克服
- 抗 HER2 薬耐性

ランチョンセミナー

乳がん領域における近年の進歩

鶴谷　純司　（近畿大学医学部内科学教室腫瘍内科部門）

Plenary Session

がん対策基本法後の緩和ケアの進歩と今後の方向性

- 地域単位の緩和ケアを向上するために私たちが次にすべきこと：OPTM-study からの示唆
- 患者・家族とのコミュニケーションとこころのケア
- 看護師の役割と責任
- がん患者と家族の就労問題
- がん相談支援体制の現状と今後の充実に向けて
  ～情報が届きにくい人へどう情報を届け支援するか～
- がん患者会・家族会の進歩と今後について

Cancer Net Japan　映画「希望のちから」を通じて臨床試験を考える

・7/28

腫瘍内科の黎明と内科の発展・腫瘍学教育を考える

- アメリカから　ＭＤアンダーソン腫瘍センター　上野直人
- 内科学における臨床腫瘍の役割と腫瘍学教育
- 地域における腫瘍内科の役割と腫瘍学教育
- 弘前大学における新設腫瘍学内科の立ち上げと医学教育の経験
- 日本のがんセンターと大学における腫瘍内科学の教育

効果的地域連携の試み

- HER2 陽性乳がんに対するトラスツズマブ術後補助療の地域連携
  新潟トラスツズマブネットワークの取り組み
- 地域連携パスを用いた医科歯科連携によるビスフォスフォネート顎骨壊死予防
- 沖縄県における「患者必携」「地域医療情報　沖縄がんサポートハンドブック」の作成と地域連携　　http://www.okican.jp/index.jsp
- 進行がんにおけるケアサイクル：医療の価値を高める試み
- 経口併用化学療法地域連携チームによる実践的取組（平成 23 年度厚生労働省チーム医療実証事業による活動の報告）

ランチョンセミナー

大腸がんに対する治療法

岡本　渉（近畿大学医学部内科学教室腫瘍内科部門）

抗がん剤を安全に使用するには？-新薬はどんな医師が使用するべきか-

- リスクコミュニケーション　新薬を安全に使用するために
- 新規抗がん剤における企業の安産対策の取り組み
- 抗悪性腫瘍剤の安産対策について-リスクマネジメントとＰＭＤＡの取り組み-
- Risk Communication:A brief review
- 専門医制度：変革の波とその方向性-日本専門医制評価・認定機構から-
- 医薬品の使用条件の設定と日本臨床腫瘍学会専門医制度

4)まとめ

日本のがん治療における腫瘍内科の位置づけがもっと注目されないとがん治療の均てん化は先が遠い。この点を解決するためにも腫瘍内科医を増やさないとダメだと思った。内科・外科領域における相互理解が必要。内科学領域内での臨床腫瘍の位置づけももっと重要視されてほしい。

患者にとっては「どんな診療科に診てもらいたいか」ではなく、「自分のがんにとって最適なチーム医療で診てもらいたい」のが本心。診療科の壁を超えた連携が必要。

その他感想

ソフト面のセッションが多くて驚いた。

がん対策基本法、推進基本計画などにおいて、抗がん剤使用の位置づけを意識した意見交換している姿は、患者としてうれしかった。

・緩和的な視点が多く盛り込まれていることもよいことだと思った。

塩尻経由で大阪へ

大阪国際会議場の窓から～六甲を望む～

Room1 でのシンポジウム

ペイシェント・アドボケートブースの前